

看護学生の口腔ケアに対する学習意欲 — 1 年次と 4 年次の比較 —

中島 富有子^{1,2}, 原 やよい¹, 窪田 恵子¹, 大川内 鉄二¹

1) 福岡看護大学・看護学部 2) 学校法人 福岡学園・口腔医学研究センター

要約: 本研究の目的は, 1 年次と 4 年次を比較し, 看護学生の口腔ケアに対する学習意欲の変化を明らかにすることである. 看護学生の 1 年次と 4 年次に, 口腔ケアに対する学習意欲の質問紙調査を行った. 有効回答 71 名のデータを得て, 分析を行った.

その結果, 1 年次より 4 年次が口腔ケアに対する学習意欲が高かったが, 有意差は認めなかった. 1 年次は, 基本的信頼感が高い方が口腔ケアに対する学習の興味が強い傾向があった. 4 年次には, 関連が認められなかった. 口腔ケアに対する学習意欲は, 1 年次から 4 年に変化し, 関連要因として, 大学生活の楽しさ, 学内の友人の多さ, 学外の友人の多さがあった. 看護学生の学習意欲を高めるには, 大学生活が楽しめ, 友人関係への支援が必要であることが示唆された. 1 年次と 4 年次における学習意欲の状況, 関連因子を踏まえ, 教育する必要があると考えられた.

キーワード: 看護大学生, 口腔ケア, 学習意欲, 1 年次, 4 年次

Motivation to Learn about Oral Care Among Nursing Students -A comparison of first- and fourth-year students-

Fuyuko NAKASHIMA^{1,2}, Yayoi HARA¹, Keiko KUBOTA¹, Tetsuji OOKAWACHI¹

1) Fukuoka Nursing College, Faculty of Nursing

2) Oral Medicine Research Center, School Organization of Fukuoka Gakuen

Abstract: This study aims to clarify the change in nursing students' motivation to learn about oral care by comparing first- and fourth-year students. A questionnaire was distributed to first- and fourth-year nursing students concerning their willingness to learn about oral care. Data were obtained from 71 valid responses and subsequently analysed. Results showed that the motivation to learn about oral care was higher in the fourth year than in the first year, but the difference was not significant. In the first year, those with higher levels of basic confidence tended to show greater interest in learning about oral care. Among fourth-year students, no similar relationship was found. The motivation to learn about oral care changed from the first year to the fourth year. The enjoyment of university life, the number of friends an individual has in the school, and the number of friends an individual has outside the school, are related factors. To increase nursing students' motivation to learn about dental care, it was necessary for them to enjoy university life and develop friendships. There is a need to educate students based on the circumstances surrounding the motivation to learn among first and fourth-year students as well as the identified related factors.

Keywords: nursing students, oral care, first-year students, fourth-year students

Fuyuko NAKASHIMA

2-15-1 Tamura, Sawara-ku, Fukuoka, 814-0193, Japan

Phone: +81-92-801-0411, E-mail: nakashima@college.fdcnet.ac.jp

1. はじめに

人にとって、口腔を健康に保ち口腔機能を維持することは、食事を美味しく食べることや人との会話など社会生活を送る上で重要である。口腔の健康には、口腔ケアが必要であり、口腔の清潔を保つ器質的口腔ケアと口腔の機能を維持・回復させる機能的口腔ケアがある[1]。適切な口腔ケアは、ミュータンスレンサ球菌[2]やレッドコンプレックス[3]などの微生物に起因した歯の喪失の二大原因であるう蝕や歯周病の予防に効果的である[1]。また、口腔の問題は全身の健康につながり、先行研究において、適切な口腔ケアが、誤嚥性肺炎予防[4]、心内膜炎予防[5]となり、認知症の予防にも効果があること[6]などが明らかになっていた。近年、口腔ケアの重要性が高まり、2011年、「歯科口腔保健の推進に関わる法律」が公布され、2012以降、診療報酬改定では、周術期口腔機能管理の推進が図られ、医科と歯科が連携し患者の口腔機能管理を行い診療報酬の加算ができる。

口腔の健康問題に対して、歯科医師や歯科衛生士が口腔の高い知識・技術に基づいた口腔ケア、全身の健康問題を踏まえた看護師が行う日々の口腔ケアなど多職種が連携し、効果的な口腔ケアを行うことが重要である[7][8]。

以上のことを踏まえ、看護教育では、多職種連携を含めた口腔ケアについて充実した教育を行う必要がある。吉澤ら[9]が学習意欲と成績の関連を明らかにしているように、教育の充実には、看護学生の学習意欲を高めることが必要である。先行研究を概観すると学習意欲に関する先行研究は多いが、口腔ケアの学習意欲に焦点を絞った縦断的な研究は見当たらなかった。本研究では、1年次と4年次を比較し、看護学生の口腔ケアに対する学習意欲の変化を明らかにすることを研究目的とし、口腔ケアの充実のに向けた教育の示唆を得たいと考えた。

また、口腔ケアの学習に影響するものとして、先行研究を基に、学習に関連があると考えられる大学生活[10]、友人関係[11]、自己に対する信頼である基本的信頼感[12][13]について着目した。基本的信頼感[12][13]は乳幼児期に形成され、その後の発達段階でも持続し、特に自我同一性が確立する青年期に影響する。研究対象の看護学生が青年期であり、自我同一性の獲得時期であった。基本的信頼感は、自我同一性の中心的要素の一つと考えられ、基本的信頼感に問題がある場合は、

青年期に同一性の拡散状態を呈する可能性がある。自我同一性の獲得とは、他者と違い、この自分こそが本当の自分であると思えるものである。自分がかめず、自分がないように感じる状態が自我同一性の拡散である[12][13]。自我同一性の拡散は、精神的健康が保てず、看護学生の学習意欲の低下に影響する[14]と考えられた。さらに、看護は対人関係を基盤に実施するものであり、他者と自分との境界が明確になる自我同一性の獲得ができないことが対人関係の構築の障害となる。そのため、自我同一性の獲得に影響する基本的信頼感が看護学生にとって、重要と考え調査内容とした。

本研究は、影響要因を含め看護学生の口腔ケアに対する学習意欲について、1年次から4年次の変化を明らかにする実態調査を分析したものである。

2. 研究方法

2.1 研究対象者

研究対象は、2018年度入学の看護大学生で4年次に在籍している102名を対象とした。

2.2 調査期間

2018年1年次前期～2021年4年生前期に質問紙調査を行った。

2.3 調査項目

1) 基本属性

性別、生活状況として、家族と同居または一人暮らしか、アルバイトをしているかを調査した。

2) 口腔ケアに関する学習意欲

先行研究[7]-[11]を参考に、研究者が口腔ケアに関する学習意欲の項目を設定した。「非常に当てはまる」から「まったく当てはまらない」の4件法(1～4点)で評定する。項目は、「①口腔ケアに関する学習に興味がある」「②患者の健康状態に合った口腔ケアを学びたい」「③患者が楽しく食事できるように口腔ケアを学びたい」「④口腔ケアにおける他職種連携の方法を学びたい」で、得点が高いほど学習意欲があると見なした。「④口腔ケアにおける他職種連携の方法を学びたい」については、研究対象が所属する大学において、看護学生の教育目標が、【多職種】ではなく【他職種】との連携であることから【他職種】に設定した。

3) 影響要因

大学生生活の楽しさについて、「とてもつまらない〜とても楽しい」の5件法(1〜5点)で調査した。学内友人数、学外友人数の多さについては、「とても少ない〜とても多い」の5件法(1点〜5点)で調査した。

青年期の自我同一性の獲得について、谷[12][13]が開発した基本的信頼感尺度を使用した。この尺度は、6項目(6〜42点)からなり、「非常にあてはまる(7点)」から「全く当てはまらない(1点)」の7件法で評定し、逆転項目については、評定を逆転させた。得点が高いほど自己に対する信頼感がある。

2.4 データ収集方法

研究対象者には、研究の説明書と質問紙を配布し、同意書の署名をもって同意とみなす旨を文書および口頭で説明した。同意書の署名で研究参加を確認した。質問紙は、記入後に個人用の回収用封筒に入れ厳封してもらい、大学内に設置した回収ボックスへの投函を依頼した。

2.5 分析方法

得られたデータを Kolmogorov-Smirnov 検定でデータの正規性ないことを確認後、ノンパラメトリック検定を行った。1年次と4年次のデータ比較については、Wilcoxon の符号順位検定を行った。2群間の比較に関しては Mann-Whitney の U 検定、2群間の相関には Spearman の検定を行った。データの分析には、統計解析ソフト SPSS 25.0J For Windows を用いた。なお、結果がわかりやすい論文とするため先行研究[14]で見られるように、本研究では、ノンパラメトリック検定だが、中央値(範囲)ではなく、平均値±標準偏差で表した。

2.6 倫理的配慮

研究対象者である看護学生の保護者に対して、研究に関することを文書で説明し調査研究の承諾を得た。研究対象者には、研究の目的や方法、回答の任意性、プライバシーの保護、拒否や中断による成績への影響の不利益はないことなど、文書および口頭で説明した。同意書への署名をもって同意が得られたとみなした。基本的信頼感尺度の使用については、開発者の許可を得た。本研究は、福岡学園倫理審査委員会により許可を得て実施した(許可番号 第345号)。

3. 結果

3.1 対象者の基本属性(表1)

看護学生82名より回収(回収率80.4%)、有効回答71名(86.6%)であった。男性9名(12.7%)、女性62名(87.3%)で、1年次の年齢平均が18.37±0.66歳、4年次の年齢平均が21.45±0.71歳であった。1年次に家族と同居している者が50名(70.4%)、一人暮らしをしている者が21名(29.6%)、4年次に家族と同居している者が48名(67.6%)、一人暮らしをしている者が23名(32.4%)であった。1年次にアルバイトを行っている者が54名(76.1%)、行っていない者が17名(23.9%)、4年次にアルバイトを行っている者が52名(73.2%)、行っていない者が19名(26.8%)であった。

表1. 対象者の基本属性

		n=71	
項目		データ	
性別	男性	9 名 (12.7 %)	
	女性	62 名 (87.3 %)	
生活形態	家族と同居	1年次	50 名 (70.4 %)
		4年次	48 名 (67.6 %)
	一人暮らし	1年次	21 名 (29.6 %)
		4年次	23 名 (32.4 %)
アルバイト	行っている	1年次	54 名 (76.1 %)
		4年次	52 名 (73.2 %)
	行っていない	1年次	17 名 (23.9 %)
		4年次	19 名 (26.8 %)
年齢	1年次	18.37 ± 0.66	歳
	4年次	21.45 ± 0.71	歳
mean±SD			

3.2 口腔ケアに関する学習意欲(表2)

「①口腔ケアに関する学習に興味がある」は、1年次2.79±0.81点、4年次2.80±0.77点であった。「②患者の健康状態に合った口腔ケアを学びたい」は、1年次3.07±0.70点、4年次3.21±0.70点であった。「③患者が楽しく食事できるように口腔ケアを学びたい」は、1年次3.15±0.69点、4年次3.30±0.72点であった。「④口腔ケアにおける他職種連携の方法を学びたい」は、1年次2.94±0.83点、4年次3.04±0.78点であった。

口腔ケアに関する学習意欲の全項目で、1年次より4年次が高くなっていたが、有意差は認めなかった。

3.3 影響要因 (表3)

「①口腔ケアに関する学習に興味がある」は、4年次に、学内友人数・学外友人数・大学生生活の楽しさと弱い相関を認め、学内や学内での友人が多く大学生生活を楽しんでいる方が口腔ケアの学習に興味を持つ傾向があった。1年次は関連を認めなかった。「②患者の健康状態に合った口腔ケアを学びたい」は、1年次および4年次に影響要因と関連を認めなかった。

「③患者が楽しく食事できるように口腔ケアを学びたい」は、4年次に大学生生活の楽しさと弱い相関を認め、学生活を楽しんでいる方が楽しく食事できるように口腔ケアを学びたいと認識している傾向があった。1年次は関連を認めなかった。

「④口腔ケアにおける他職種連携の方法を学びたい」は、1年次に学内友人数と弱い相関が認められ、学内の友人が多いと他職種連携の方法を学びたいと認識する傾向があった。4年次は、大学生生活の楽しさ・学内友人数と弱い相関が認められ、大学生生活が楽しく学内

の友人が多いと他職種連携の方法を学びたいと認識する傾向があった。

基本的信頼感の1年次 26.38±5.49 点、4年次 28.45±6.33 点で、4年次が有意に高かった ($p<0.01$)。

1年次は、基本的信頼感と「①口腔ケアに関する学習に興味がある」に弱い相関が認められ、基本的信頼感が高い方が口腔ケアの学習に興味を持つ傾向であった。4年次は、基本的信頼感との相関関係は認められなかった。

基本属性と口腔ケアの学習との関連は認めなかった。

4. 考察

本研究では、1年次と4年次を比較し、看護学生の口腔ケアに対する学習意欲の変化を分析した。その結果、有意差は認めなかったが、1年次より4年次が口腔ケアに対する学習意欲が高くなる変化を明らかにした。保田ら[15]の研究で、4年次には、ほとんどの看護

表2. 口腔ケアに関する学習意欲

n=71					
項目		mean	±	SD	
学習の興味	1年次	2.79	±	0.81	点
	4年次	2.80	±	0.77	点
健康状態に合った口腔ケア	1年次	3.07	±	0.70	点
	4年次	3.21	±	0.70	点
楽しい食事を目指す口腔ケア	1年次	3.15	±	0.69	点
	4年次	3.30	±	0.72	点
口腔ケアにおける他職種連携	1年次	2.94	±	0.83	点
	4年次	3.04	±	0.78	点

wilcoxonの符号順位検定

表3. 口腔ケアの学習意欲と影響要因との相関関係

		n=71			
		大学生生活の 楽しさ rs	学内友人の 多さ rs	学外友人 の多さ rs	基本的信頼感 rs
学習の興味	1年次	.200	.063	.042	.269*
	4年次	.330**	.259*	.282*	.002
健康状態に合った 口腔ケア	1年次	.155	.140	.037	.085
	4年次	.154	.093	.098	0.01
楽しい食事を目指 す口腔ケア	1年次	.169	.061	.032	.184
	4年次	.262*	.180	.119	.053
口腔ケアにおける 他職種連携	1年次	.089	.239*	.152	.048
	4年次	.387**	.323**	.204	.107

pearman * $p<0.05$ ** $p<0.01$

学生が口腔ケア実践の意思を持っていることを明らかにしているように、入学間もない1年生に比べ4年次は看護師に必要な知識・技術を得て、口腔ケアの学習意欲が高まったと考えられた。

本研究で、口腔ケアに対する学習意欲の関連要因として、大学生活の楽しさ、学内の友人の多さ、学外の友人の多さがあつた。1年次と4年次で違いがあつたものの、看護学生の学習意欲を高めるには、大学生活が楽しめ、友人関係への支援が必要であることが示唆された。

4年次において、「①口腔ケアに関する学習に興味がある」は、学内や学内での友人が多く大学生活を楽しんでいる方が口腔ケアの学習に興味を持つ傾向が明らかになった。1年次には認められない結果であつたが、入学間もないことが影響したと考えられた。先行研究[10]で、大学生活での満足感が学習意欲に好影響を及ぼしていることが明らかになっている結果と類似していた。4年次において、口腔ケアの学習の興味を高めるには、大学生活が楽しめる支援が必要であると考えられた。今回の調査では、大学生活が楽しい要因については調査していないため、今後、大学生活の楽しさに影響する要因について検証する必要がある。学内や学内での友人が多いことが、口腔ケアの学習意欲と関連していたことは、藤原らの研究[16]で、学習意欲が周囲の人の影響を受けることが明らかになっているように、学内及び学外の友人の影響を受けたと考えられた。口腔ケアの学習意欲を高めるには、友人関係から良い影響を受けるような支援の必要性が示唆された。

「②患者の健康状態に合った口腔ケアを学びたい」は、1年次および4年次の影響要因と関連を認めなかった。患者の健康状態に合った口腔ケアの学習意欲を高める対策に向けて、今後、影響要因について検証する必要がある。

「③患者が楽しく食事できるように口腔ケアを学びたい」は、4年次に大学生活が楽しい方が、楽しく食事ができる口腔ケアを学びたいと認識する傾向があつた。4年次に、大学生活が楽しめる支援の必要性が示唆された。1年次は関連を認めなかった。「①口腔ケアに関する学習に興味がある」の項目同様、1年次は入学間もないことが影響したと考えられた。

「④口腔ケアにおける他職種連携の方法を学びたい」は、1年次に学内の友人が多いこと、4年次は、大学生活が楽しく学内の友人が多いことが他職種連携の

方法を学びたいと認識する傾向が明らかになった。他職種連携は、医療者同士の対人関係が重要であることから、友人関係という関連になったと考えられた。1年次及び4年次において、口腔ケアにおける他職種連携が、学外ではなく同じ看護の学習をする学内の友人の影響と言えた。先行研究[14]で学内友人が多い方が看護の主体的学習意欲に関連があつた結果と類似していた。同じ看護を目指す友人関係から、いい影響が得られる支援の必要が示唆された。

1年次は、基本的信頼感と「①口腔ケアに関する学習に興味がある」に関連を認め、基本的信頼感が高い方が口腔ケアの学習に興味を持つ傾向が明らかになった。4年次は、認めなかった。4年次は1年次と比較し基本的信頼感が高く変化していたことから、4年次が自我同一性の確立が進んだことが影響したと考えられた。看護師は対人的援助を基盤に看護を行う医療専門職であるが、先行研究[17]では、対人関係の基本的な要件の基本的信頼感が十分備わっていない学生が存在し、臨地実習が対人関係能力向上につながることを示唆していた。1年次は、研究調査後に行われる11科目の臨地実習における教育などが、口腔の学習意欲を高めることにつながる可能性が考えられた。

研究で、1年次と4年次の口腔ケアに対する学習意欲の違いが明らかになり、学習意欲が4年間の中で変化し、学生の状況に合わせた学習支援が必要であることが示唆された。

研究の限界と課題として、以下のことが考えられた。今回、口腔ケアに対する学習意欲の関連要因として調査項目を設定したが、口腔ケアに特化したものでなく学習意欲全般に関するものとなっていた。そのため、本研究結果が、口腔ケアの学習意欲に特化した影響要因というより、大学の学習全般に対するものの可能性があつた。今後の課題として、研究の調査項目を再検討し、口腔ケアに特化した影響要因を設定し看護学生の口腔ケアに対する学習意欲について、研究を進めていくことが課題である。

5. 結論

看護学生の1年次から4年次に口腔ケアの学習意欲の変化として、本研究では、以下のことが明らかになった。

1. 有意差は認めなかったものの、1年次より4年次に口腔ケアに対する学習意欲が高くなっていた。

2. 1年次は、基本的信頼感が高い方が口腔ケアに対する学習の興味が強い傾向があったが、4年次には、認められなかった。
3. 口腔ケアに対する学習意欲は、1年次から4年に変化し、関連要因として、大学生活の楽しさ、学内の友人の多さ、学外の友人の多さがあり、看護学生の学習意欲を高めるには、大学生活が楽しめ、友人関係構築への支援が必要であることが示唆された。

参考文献

- [1] 厚生労働省 (2008) : e-ヘルスネット生活習慣病予防のための健康情報サイト 歯・口腔の健康, <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/teeth/yh-010.html>, 検索日 2021 年 9 月 3 日.
- [2] 蒔苗剛, 下山佑, 本弘紀, 松本弘紀, 木村重信, 田中光郎 : 小児プラークにおけるミュータンスレンサ球菌定着量と齲蝕罹患状況の関連, 小児歯科学雑誌, 55(1), pp.51-60, 2017.
- [3] Chigasaki O, Takeuchi Y, Aoki A, Sasaki Y, Mizutani K, Aoyama N, Ikeda Y, Gokyu M, Umeda M, Ishikawa I, Izum Y: A cross-sectional study on the periodontal status and prevalence of red complex periodontal pathogens in a Japanese population, Journal of Oral Science, 60(2), pp.293-303, 2018.
- [4] Claar D van der Maarel-Wierink, Jackie NOVanobbergen, Ewald M Bronkhorst, Jos M G A Schols, Cees de Baat: Oral health care and aspiration pneumonia in frail older people:a systematic literature review, Gerodontology 30, pp.3-9, 2013.
- [5] 博多研文, 川又均, 今井裕 : 感染性心内膜炎発症における口腔内細菌の関与, Dokkyo Journal of Medical Sciences, 41(1), pp.103-113, 2014.
- [6] Yamamoto T, Kondo K, Hirai H, Nakada M, Aida J, Hirata Y: Association between self-reported dental health status and onset of dementia: a 4-year prospective cohort study of older Japanese adults from the Aichi Gerontological Evaluation Study (AGES) Project, Psychosom Med, 74(3), pp.241-248, 2012.
- [7] 小原真知子 : 地域包括ケア時代における特別養護老人ホームにおける食・口・ケアと多職種連携, 日本口腔科学会雑誌, 68(4), pp.256-260, 2019.
- [8] 厚生労働省 : チーム医療推進のための基本的な考え方と実施的事例集, 2011, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001ehf7.html>. 閲覧日 2021. 8 月 5 日.
- [9] 吉澤隆志・松永秀俊・藤沢しげ子 : 学習意欲が定期試験成績向上に及ぼす効果について, 理学療法化学, 24(3), pp.463-466, 2009.
- [10] 道廣睦子, 瀧本茂子, 小島賢子, 明石智子, 幸島美絵, 安福真弓 : 看護学生の大学に対する満足度が学習意欲と自己教育力に及ぼす影響, 日本看護学会論文集 看護教育, 45, pp.63-66, 2015.
- [11] 佐藤美佳 : 看護学生の友人関係への動機づけと学習動機づけおよび自律性欲求・有能さの欲求と関連, 日本看護研究学会雑誌, 36(2), pp.35-46, 2013.
- [12] 谷冬彦 : 青年期における基本的信頼感と時間的展望, 発達心理学研究, 9(1), pp.35-44, 1998.
- [13] 谷冬彦 : 自我同一性的人格発達心理学, 発達心理学研究 ナカニシヤ出版 (京都), pp.49-50, 2008.
- [14] 原やよい, 中島富有子, 窪田恵子 : 看護学生の学習意欲に影響を及ぼす要因, バイオメディカル・フュージ・システム学会誌, 20(2), pp.29-35, 2018.
- [15] 保田麻里, 池田利恵 : 看護学生における口腔ケア教育の現状と歯科保健行動との関連性, 日本歯科大学東京短期大学雑誌, 5(1), pp.60-67, 2015.
- [16] 藤原みのり, 二井谷真由美, 今井多樹子, 高瀬美由紀 : 看護系大学生の学習意欲を高める要因の探究, 日本医学看護学教育学, 29(2), pp.22-30, 2020.
- [17] 新見明子, 黒田裕子, 合田友美, 小藪智子, 岡野一 : 伸子看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究 (第一報) 看護学生の対人援助能力, 川崎医療短期大学紀要, 26, pp.15-21, 2006.



中島富有子 (なかしま ふゆこ)

福岡看護大学 看護学部

地域・在宅看護部門

精神看護学分野 教授

博士 (臨床心理学)

BMFSA 学会会員



原 やよい (はら やよい)

福岡看護大学 看護学部

地域・在宅看護部門

精神看護学分野 助教

修士 (看護学)



窪田 恵子 (くぼた けいこ)

福岡看護大学 学長

博士 (芸術工学)



大川内 鉄二 (おおかわち てつじ)

福岡看護大学 看護学部

地域・在宅看護部門

精神看護学分野 助教

修士 (看護学)